

長寿者を核に、奄美の多様性と深みを発信

写真家 山中 順子さん



山中順子(やまなか・じゅんこ) 1970年生まれ。写真家・アートディレクター・製作プロダクション「サウンルック」代表。ライフワークは長寿・島人・自然・文化・生命・食など。2003年、奄美群島「百歳紀行」0歳新生児「沐浴」撮影・取材開始。2004年、東京で「心」写真展。2005年、フィリピンの医療ボランティア参加・講演。2006年、奄美のアンテナショップ、奄美黒糖麦酒などプロデュース。2007年加計呂麻島のうこんきび酢テレビ放映プロデュース。徳之島「長寿の水」同、「奄美百歳写真展」抜群のネットワークとセンスで奄美群島を多角的に発信する。連絡先は045・681・8889。奄美を発信するサイト「あまみん=奄民」がスタート。ブログ「山中順子のあまみ悠々滔々」 <http://www.amamine.jp>

横浜市の写真家山中順子さん(36)。七年前から奄美に通い、百歳の長寿者や祭り、新生児、伝統産業などを撮り続けている。「長寿の島」の長寿者たちの身の置き方を通して、奄美という多様な群島の深みを表現する新たな表現者だ。集落や施設のお年寄りたちと雑談をしながら撮ったお年寄りは百十人余。作品は今年三月、東京の展覧会で「世紀を越えたメッセージ」として発表され、注目された。今年も九月十九日のアラセツに奄美大島入り。伝統行事や聖地などを精力的に撮影した。

七年前、タレントの撮り手としての本能的な出会い。あるが、山中さんの奄美影で初めて奄美大島を訪ねた。島の浜辺で光に触れ、衝撃を受けた。「写真家としてというより、人間として私はここに来べきだった。この島に通い続けよう」と決心した。その人に出会いも偶然のようだが、然るような身体の共鳴が、

島人の自然体の生き方に共感

「私にとって奄美は母、太陽、魂」

が待ち受けていた。加計呂麻島、百歳のハルさんに会った。寝たきりで目も耳も不自由、会うのは無理かもねという周囲の声を振り切り、部屋に入った。アンダーウェアにきたよ。睡が含た。布団の上に座っていたハルさんが手を招きした。やがて、引きこもって

を歌い、手踊りをして縁側で話し込んだ。「取材や写真を撮ること自体は、たいていお会いしたいというだけで、生き神様のような方にお会いし、お互いに感じ合ひ、触れ合ひ、それが一番大切なことだと思っています。」「今度はだんなさんを連れてきなさいよ。別れ際にハルさんは言った。この時撮った写真を持って翌年、ハルさんを訪ねた。「よ、来たね。」「だんなさん、は連れてきたか。」「山さんの顔を覚えてながら言った。ハルさんは、前

年の光景をしっかりと記憶していた。こうして毎年、「敬老の日」を境に約一カ月の間、五十近い撮影機材を背負って島々をめぐる。写真を撮るだけでは、写真家を泊まって家庭料理をほおばり、唄の座や踊りの輪に加わって魂を開放し、黒糖焼酎に肌を染めた。新生児、伝統行事、大島紬や黒糖。住まう人々と体温を共有する時間の流れの中で写真を撮った。長身、繊細さとおおらかさ、寛容と追求をひびき、直観がひらめくと即行動する。素足にTレドマークのげたを履いて、森もやぶも浜も歩くと、蚊のじゅうたん爆撃やヒルの強烈な毒に熱を出しても、蚊に刺されるというのには普通だよ」と死語になつた言葉をつぶやきつつ、ひるまず、衝かれたように撮る。5面へつづく



夫婦合わせて200歳 写真・山中順子

奄美・1世紀の生命力を撮る



ハルさん 写真・山中順子

写真は会話しつつ撮る。その間合いとリズムが、閉ざした深層の扉を開かせ、醸成してきた一世紀の歩みを発酵させる。本人は「ただそばにいてお寄りとの時間を大事にしたいだけ」と話すが、お年寄りと時間を共有することは簡単なようで難しい。都市化、核家族化が進む社会はお年寄りを孤立させる方向にあり、「そばに居る状態」をつくり出すことさえ難しいのが現実だ。「個人」の魂の重みの前に何も

ず、たまたまに居ることでできる人は専門家でないと。言ったのはユング派心理療法の権威で京大名誉教授の故河合隼雄

さんだが、山中さんも島の人の心を開かせる独特の共鳴体を内に秘めていた。一連の写真は今年三

月、東京ビッグサイトの「2007健康博覧会」で「世紀を超えたメッセージ」山中順子写真展



ハルさんの墓前でしばしハルさんとの時間を共有する山中さん(瀬戸内町諸純)

奄美大島百歳」として発表された。写真は対象をとらえず、返す目で撮り手の素養を写し込む。その作者の世界(作品)には、その作者の世界観がある。「世界」は見えるか、世界観は見えるように見えぬ。世界は視覚に入り、世界観は心に染み入るから心で観るほかない。双方が練り合わさって作品は見る者に余韻と記憶という力を与える。会場には七万人が入場。写す側と写される側の内

面が響き合った作品は、大きな反響を呼び、余韻を残した。今年九月十九日のアラセツに奄美大島入り。龍郷町のヒラセマンカイや笠利町の八月踊りを撮り、加計呂麻島まで足を伸ばした。各集落の高齢者や聖地、豊年祭も撮った。島で会う人は「順ちゃん」と親しみを込めて呼び寄る。「私のテーマは生命で、日ごろから本気の元氣とは何かを考えていました。奄美の百歳の方とお会いして、土地の旬のものを頂き、太陽や月に感謝し、自然とともに生きていくことの大切さを体感しました。旧暦や神

事に染まる。明けの道しるべを独り泣いた夜の闇を



全員100歳 老人ホームにて 写真・山中順子

溶かして
胸の奥寄せる
波の音の中に
懐かしくて 暖かい
あなたの声がある
瞳閉じれば
今もまだ 浮かぶ姿は
ハルさんが作らせたよ
うな詞だった。
ハルさんの家族が山中
さんに言った。「最後に
友達になったのはあなた
だけね。きつとはあちゃ
んも心から喜んでいたら
思うよ。順ちゃんの事だ
けは覚えていたものね
」
山中さんはハルさんの
墓前で手を合わせたま
ま、身動きせず、しばし
ハルさんとながって
いた。



集落の人と瞬時に親しくなり、語り合う山中さん(瀬戸内町手安)